心の輪を広げる体験作文　中学生部門　◆最優秀賞

「りょうちゃんもみんなと同じ」

神奈川県立相模原中等教育学校　二年　佐伯（さえき）　葵（あおい）

「りょうちゃんどこいっちゃったの。」

これはショッピングモールに行った時に叔母がよく言うセリフだ。

私のいとこのりょうちゃんは小さな頃から周りの子とは少し違っていた。一般的にアスペルガー症候群や多動性障害と呼ばれるような症状を抱えている。りょうちゃんは小さな頃から迷子になることが多かった。また、何度も同じことを説明されていることも多かった。これだけを聞くと多くの人は彼が自分勝手で協調性のない子だと思うだろう。でも、彼は小さな頃から優しいことだけは確かだった。常に思いやりを持っていて私と兄が喧嘩をして泣いていたら心配をしてくれるような子だ。私が発達障害と言われて想像する人物像とはあまりにもかけ離れている。私はそんな彼と関わって反省したことがある。それは「発達障害」という単語に勝手にマイナスなイメージを結びつけ、可哀想だと同情していたことだ。発達障害や障がい者に対する私のイメージはある人物のある一面を取り上げただけに過ぎないのだと知った。そしてそのイメージが障がい者やその家族を不安にさせ、精神的に追い込むのだと考えた。健常者と同

じように障がい者も一人一人違うのだとりょうちゃんは私に教えてくれた。一人一人違うという意識は健常者同士では当たり前のように認識されていることだ。私の道徳の教科書にも当たり前のような顔をして載っている。でも、どこに障がい者を沢山取り上げて障がい者がもっている障がいや考えもそれぞれ違うと書いてある教科書があっただろうか。それどころか障がい者と関わったことのない人がいるのが現状だ。同じ人間なのだから同じように関わるべきという意識が私も同じように無意識のうちに少しずつ欠けていっていたのだろう。りょうちゃんがいなければきっと気が付けなかっただろう。

また、私は最近障がい者について深く考える出来事があった。公園で小学生くらいの子供達が六人ほどでサッカーの練習をしていた時だった。その子供達の中に一人、目の見えない子がいたのだ。目が見えない子も他の子と同じようにサッカーができるのか気になって私はその子達のサッカーを見守った。そこで私はある光景を見た。ゴールに近い距離からだったが目の見えない子がシュートを決めたのだ。そしてその時に周りの子供達が肩を組んで一緒に喜んでいたのだ。彼らにとっては何気ない日常だろう。でも私はこの光景を見てある言葉を思い出した。

「障がいがあるということは不幸ではなく不自由なだけ。障がいが

あっても普通の生活をして生きていきたい。」

この言葉はいつかテレビかなにかで耳にした障がい者の言葉だ。この子供達は目の見える見えないに関わらず友達として同じように接して同じように一緒に喜んでいる。まさに障がい者が普通に生活出来る環境が出来上がっていたのだ。

運動が苦手な子、勉強が苦手な子、目が不自由な子。みんな同じようになにかの不自由さを抱えている。何であれ不自由さを抱えているのはみんな同じなのだ。障がい者という言葉でくくられる子たちのみんながみんな不幸で可哀想という言葉の対象なわけではない。

また、健常者という言葉でくくられている子たちのみんながみんな幸福でうらやましいという言葉の対象なわけでもない。一人一人が抱えている一人一人の不自由さを理解して互いに支えていく。それが障がい者、その家族、健常者の全員が幸せに暮らすための第一歩になるのではないか。その為には障がい者と健常者の枠を超えて話をすることが必要だ。実際、りょうちゃんは学校に馴染めていない。私は障がい者や健常者などという言葉に関係なく一人一人が互いに不自由さを理解し、支えあっていける世界になることを願う。